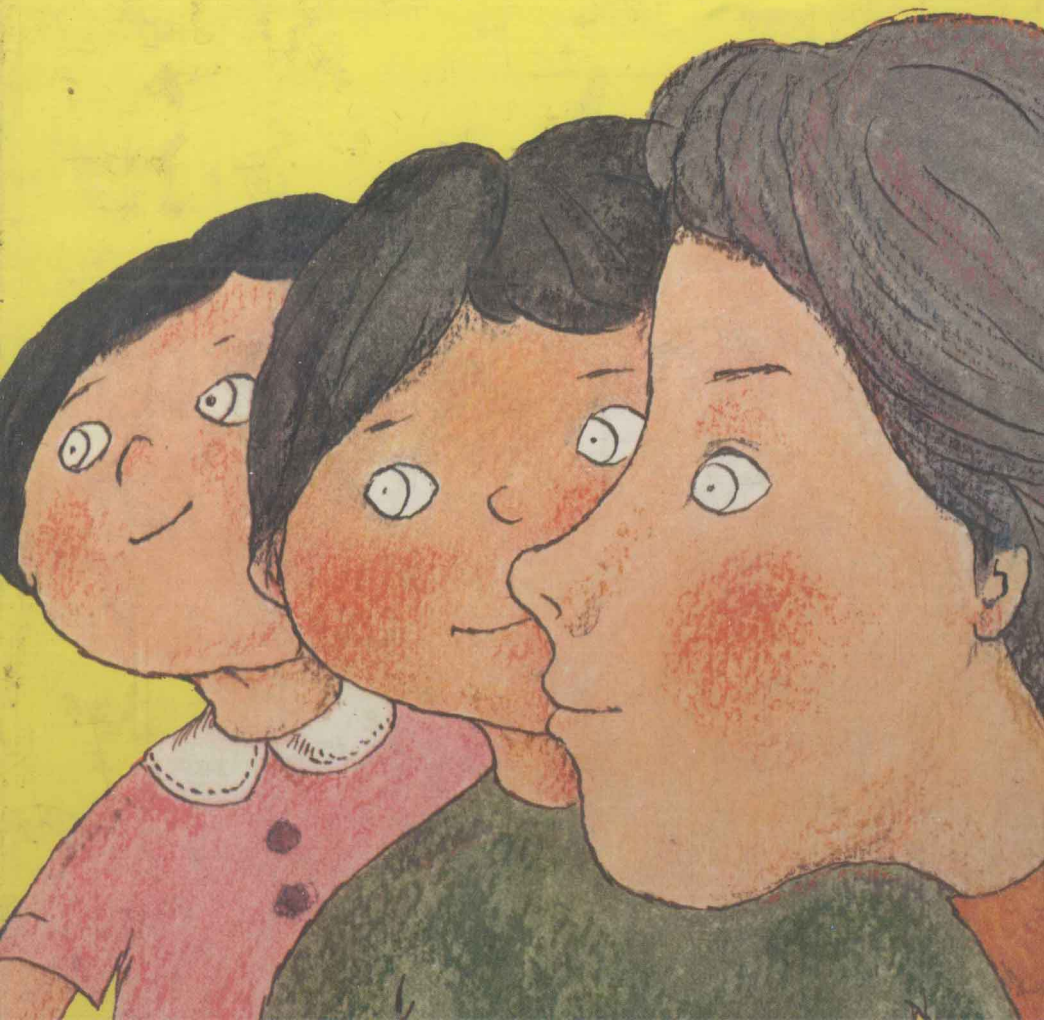
なきむし魔女先生

浅川じゅん
絵 小野かおる



なきむし魔女先生

浅川じゅん
絵 小野かおる

講談社

なきむし魔女先生

定価　880円

昭和54年5月20日　第1刷発行

作　者　浅川じゅん

発行者　野間省一

発行所　株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所　廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

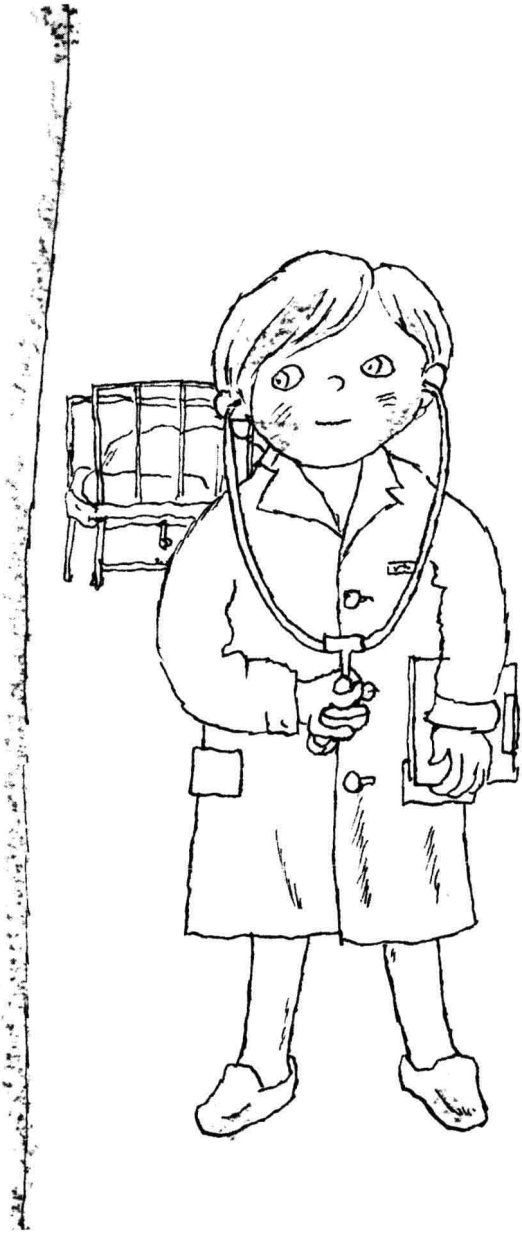
製本所　株式会社堅省堂

© Jun Asakawa 1979 Printed in Japan

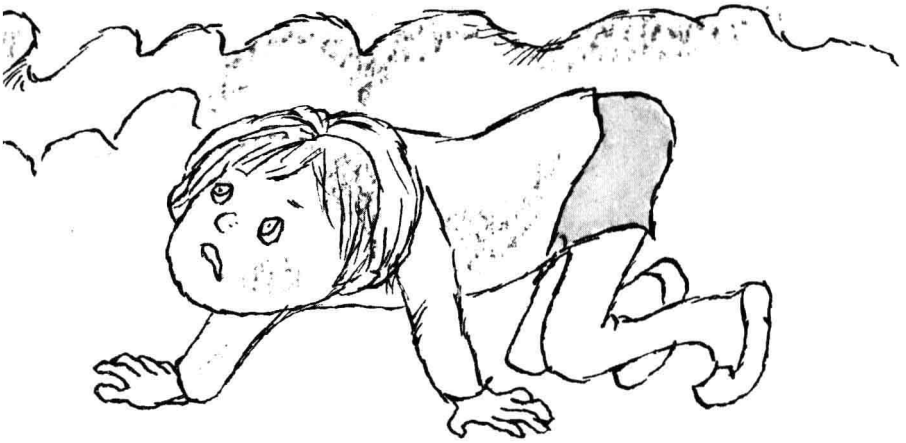
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。(児一)

8093-189880-2253 (0)

もくじ



1 一歩じゃたりなくて、二歩前へ――6
2 だめ＋だめ＋だめ……＝いい！――24
3 魔女先生の家庭訪問――40
4 あつくて、さむい物語――62
5 リュックサックが、せなかに二つ――77
6 もし、魔法がつかえたら――104
7 二学期のはじまりは――126
8 四次元の、あなにきえた？――138
9 魔女のおきてと、人間のちえと――180



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぼくたちの先生は、美女である。
ぼくたちの先生は、ぶ女である。
ぼくたちの先生は、魔女である。

なきむし魔女先生

1　一歩じゃたりなくて、二歩前へ

1

そのひとは、白いばらをいっぱいかかえて歩いてきた。あんまりばらがたくさんで、顔が見えないほどだった。

そのひとだって、ぼくには気づかなかったにちがいない。なにしろ、顔の前には花畑一まい分のばらの花がさいているんだし、このぼくときたら、生あくびかみころし、ぼやけた顔して、サブやんちのにわ先にしゃがみこんでいたんだから。

あまずっぱい、りんごのようないいにおいとともに、そのひとはぼくの前をとおりすぎかけた。顔が見えた。すっごい美人で、おとなというには子どもっぽいような、子どもというにはおとなっぽいような……。

そのときだった。

ばらの花がちった。ばらが一本はらりとけ、ひらひらと花びらが地めんにまいおちた。しゃがみこんだぼくの、ほんの目の前で。

そのひとは立ちどまり、こまったようにうつむいた。

ここまでは、べつにふしぎじゃない。そのつぎなんだ、とてつもないふしぎを見ちゃったのは。

その、おとなみたいな、子どもみたいな、かわいらしいひとがさ、ウインクしたんだ、ばらの花びらに。どうなったと思う？

道路にちらばった白い花びらが、ゆらゆらとまいあがり、まるぼうずになったばらのくきに、くっついちゃったんだ。えっ？

そのひとは、にっこりわらうと、ぼくには気づかないまま、すたすた歩いていっちゃった。

ぼくは、目をぱちぱちさせた。こんなふしぎなことって——。

サブやんが手下げふりふり、家の中からとびだしてきた。

「お待ちどお！　なんだよ、朝っぱらから、ねぼけたような顔しちゃってさ。さ、いこうぜ。」

なんていわれちゃ、話せないや。ぽかん、と、あいたままになっていた口をあわててしめ、ぼくは立ちあがった。話したって、ばかと思われるか、ぼけてると思われるのがせいぜい。ろくなことはないからな。それに、きょうは始業式なんだ。始業式、それも一学期の始業式の朝っていうのは、なにかとなやみが多いんだ。一度ちっちゃったばらの花が、もう一度さいてみせたくらいで、おどろいてちゃ……。

それにしても、ふしぎだな。あれは、手品かな。魔法かな。それとも……。

ま、いいや、いいや……。

2

始業式前の校庭っていうのは、ぶた小屋にひよこをおっぱなしたみたいなにぎやかさだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そんな中でも、友だちだけは、あっという間に見つけだせちゃう。ぼくらが校門をくぐったとたん、ゴリとエツコとアッコがかけよってきて、口々にわめいた。

「ね、だれだと思う？」

もち、先生のことだ。新しい担任がだれかってことだ。クラスがえはないから、友だちの心配はない。もっぱら、先生のことだ。

そういえば、出がけにママがいってたっけ。

「いいい、ちゃんとしたのにあたるのよ。へたなのにあたっちゃやあよ。ママ、一年間もくろうするのは、まっぴらごめんなんだから。」

へたなのにあたったら、ぼくのせきにん――みたいな口ぶりだったな、あれは。

おまけに、まみのやつまで、

「どうせだめよ。ヤチはどじなんだから、まずいのをひきあてるにきまっているわ。」

なんて、よけいなことをぬかしたっけ。

まみは、六年生。担任はおおかた持ちあげだ。へたなのにあたる心配がないもんだから、かってなことをいっちゃって。あれは、まみが二年生のときだったよね。ものすごい先生にあたっちゃったまみのやつ、毎日めそめそ。朝になると、学校になんかいきたくないと、ごねちゃってさ。

当時幼稚園生だったぼくは、つくづく、学校というのは、おそろしいところだと思ったもんだよ、うん。

ま、だれにしたって、新しい先生っていうのは気になるもんさ。だからぼくら、校庭のかたすみでおでこよせあうと、いいたいほうだいいいはじめた。

「やさしい先生がいいな。」

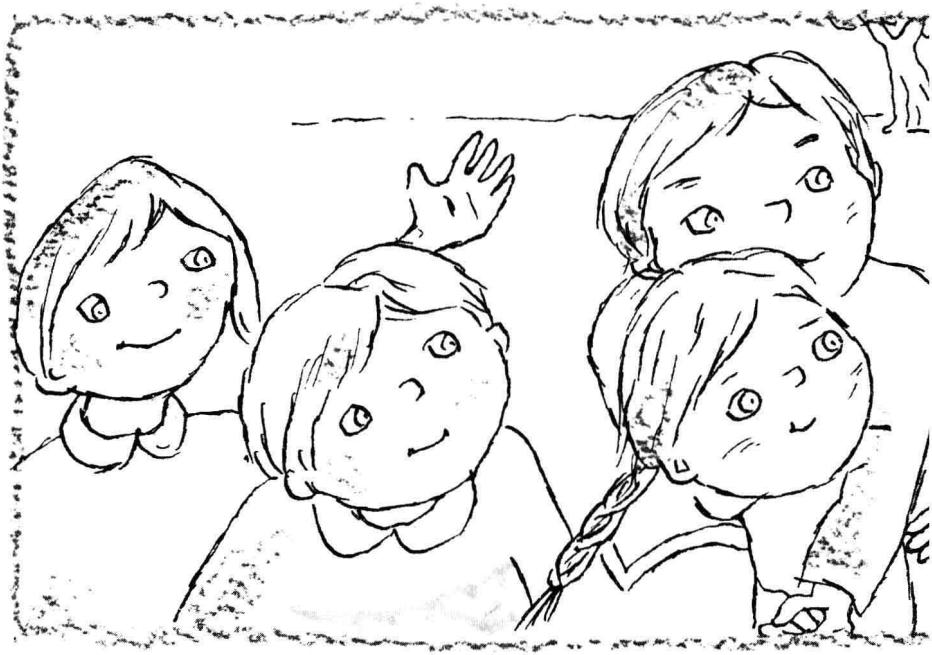
と、アッコがいえば、

「美人の女の先生！」

と、エツコがさけび、

「ぼくも！」

と、ぼくがさけぶと、エツコのやつ、にらんだよ。へんなの。さんせいされておこるなんて。



「体育がすきな先生がいいんだよな。」
と、サブやんがいえば、
「体育ばっかやってくれる先生は、いねえかな。」
おずおずと、ゴリがいいだす。
「宿題ずきはこまるよなあ。」
「お説教ずきも、ごめんだぜ。」
「男の先生は、いや。こわいもん。」
「女の先生は、うるせえしなあ。」
と、まあ、いいたいほうだいいいつくすと、
最後に、
「ま、ぜいたくはいわないけどさ――。」
と、サブやん、声をひそめて、
「おにばばだけは――。」
みんな、顔を見あわせ、いっせいに、

「やあだ！」

集合の放送。この日ばっかは、あつまるのがはやいこと、はやいこと。あっという間に整列だ。先生たちが、ぞろぞろ、のたのたとでてくる。中には、はじめて見る顔も……。ん？

あっ、れっ、れえ！

いちばん後ろからくるのは、けさの白ばらのおねえさんではないか。

「わあ、かっわいい！」

となりの列の一年生が、いや、きょうから二年生だっけ。とにかくちびすけが、さけんだ。わらい声がわき、きゅうにまわりがにぎやかになる。

「あれが先生？　まさか。」

「お茶くみのおねえさんよ、職員室の。」

そんな声もする。

なんだ。先生じゃないのか。やっぱりなあ。

ところが、なんだ。

だんの上で、校長先生はいった。

「新しい先生を、三人ごしょうかいします。新しい先生、一歩前にでてください。」
きりんみたいにのっぽの先生が、一歩前へ。つづいて、白ばらのおねえさんが一歩――じゃたりなかったんだな、小さいから。あわててもう一歩前へでた。最後に、ダンプそこのけの、ふとったおばさん先生が前にでた。
校長先生は、白ばらのおねえさんのことは、「ひの先生」だといった。大学でたての、ほやほや先生だともいった。なかよく勉強するように、ともいった。なかよく勉強したい――ぼくは思った。
新しい先生のしょうかいがおわると、担任の発表がはじまった。一年生から順に、先生の名がよばれる。よばれるたび、わあと、声があがる。大よろこびのわあ！　もあれば、がっかりのわあ……もある。二年生。三年生。そして……。
「四年一組、古田先生。」
「わあ。」
おっかなあい！　でも、まあまあ、の、わあが、となりのとなりの列からあがった。
古田先生。あだ名は、ブル。ほっぺたがぼよよーんとしているし、ぎょろ目だし、ブルドッグそっくりだ。でも、じょうだんがうまいし、体育がとくいだからな。まあまあ、さ。

「四年二組、火田先生。」
「……」
校庭がしずまりかえった。その中でとつぜん、
「わあ、いいなあ。ほやほや先生だって！」
すっとんきょうな声があがった。二年生だ。
火田先生と、ひの先生。名まえだけはにているからな。このちびすけの、とんでもないかんちがいに、どっと校庭がわきかえり、わらい声はすぐやんだ。かみつきそうな顔をして、火田先生がにらんでいるせいだ。
「四年三組。」
いよいよだ。ぼくはからだをかたくした。
「ひの先生。」
「わあ！」
「わあ……。」
大よろこびのわあ！　と、がっかりのわあ……がいっしょにあがった。大よろこびのほうは、もち、ぼくら。がっかりのほうは、あてがはずれた上級生だ。うひょひょ。大あたりだ。まみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com